

再建された。食道癌先行の6例では早期胃癌の2例にEMRを、進行癌の3例に胸骨縦切開による胃管切除を施行した。同時性、異時性を問わず内視鏡治療可能段階での早期発見が予後向上につながるものと考えられる。

4) 頸部食道癌に対する放射線治療成績

末山 博男 (県立中央病院 放射線科)
 長谷川正樹・武藤 一郎 (同 外科)
 山崎 国男・内藤 彰 (同 内科)
 穂苅 一郎 (新潟労災病院 外科)

95年7月-98年8月まで当科に登録された頸部食道癌は9例であった。全例男性で、平均年齢は70歳、病理は全例扁平上皮癌であった。平均病巣長は5.3cmで、TN分類ではT1N0 1例、T2N0 1例、T3N0 5例、T4N0 1例、T4N1 1例であった。なお、3例に異時性の、1例に同時性の重複癌を認めた。治療は表在癌、高齢者、PS不良例は照射単独とし、その他は放射線化学療法を施行した。前者は3例中2例がCRとなり、後者は6例中4例がCRとなった。局所不制御に終わった3例中1例は手術で救済され、現在無病生存している。CR6例中1例のみが25か月後骨転移を生じたが、照射で制御され、6例全例無病生存している。観察期間が短くさらに長期の経過観察を行う必要はあるが、現在まで2年粗生存率・局所制御率は76%、67%と良好な治療成績が得られている。

5) H. pylori 感染と分化型胃癌の発生・増殖に関する検討

西倉 健・渡辺 英伸 (新潟大学 第一病理)
 味岡 洋一

6) 早期胃癌に対する内視鏡的治療

成澤林太郎・小林 正明
 新井 太・本山 展隆
 望月 剛・佐藤 祐一
 松澤 純・馬場 靖幸 (新潟大学 第三内科)
 本間 照・朝倉 均

7) 当科における早期胃癌切除例の検討

藍澤喜久雄・大上 英夫
 大谷 哲也・片柳 憲雄
 山本 睦生・斎藤 英樹 (新潟市民病院 外科)
 藍沢 修

【対象】1993年から1999年8月までの切除胃癌910例中の早期胃癌413例(45.4%)を検討した。【結果】リンパ節転移陽性例はM癌224例中5例(2.2%)、SM癌189例中39例(20.6%)の計44例(10.7%)であった。また、N1が34例(77.3%)、N2が10例(22.7%)であった。リンパ節転移陽性例は、腫瘍長径が大きく、脈管侵襲陽性例が多かった。組織型別の検討では、分化型癌の10mm以下は、消化性潰瘍合併がなければ全例M癌で、リンパ節転移陽性例もない。未分化型癌は腫瘍が小さくてもSM浸潤、リンパ節転移がみられた。【結語】M癌のリンパ節転移率は2.2%と低く、SM癌では20.6%と高率である。組織型、肉眼型、大きさから内視鏡的治療、縮小手術、D2郭清の各治療方針が決定される。

8) 幽門輪温存胃切除術の検討

藪崎 裕・瀧井 康公
 土屋 嘉昭・梨本 篤 (県立がんセンター)
 田中 乙雄・佐々木壽英 (新潟病院外科)

【目的】幽門輪温存胃切除術(PPG)の臨床評価を検討する。【対象と方法】1993年以降、中部早期胃癌に施行した104例のPPGを対象に、合併症、手術時間、出血量、在院日数、栄養状態、内視鏡検査所見、99mTc胆道シンチグラム、アンケート調査による術後愁訴を、同時期の幽門側亜全摘術(DSG)351例と比較検討した。【結果】PPGは1.残胃再発2例、大動脈周囲リンパ節再発1例に再手術を要したが、原病死はない。2.DSGと比較し、手術時間、出血量、在院日数に差はなく、体重の回復は良好であった。3.内視鏡検査で、残胃炎、胆汁逆流、逆流性食道炎は、有意に軽度であったが、残渣は多かった。4.シンチで残胃への逆流を22.9%に認めた。5.術後愁訴は、ダンピングがDSGに多い他、差はなかった。【結語】PPGは残渣が多いが、根治性が損なうことなく機能温存が可能で、QOLの面からも良好な術式であると考えられた。